

外国語教育研究所だより

Vol.17 2010.11.1

「国際社会で働くということ」

明石康所長講義

明石康所長は、「国際理解と平和－国際社会で働くということ」というテーマで、大使リレー講座の公開講義を10月19日（火）に行いました。世界は「国際社会」から「グローバル社会」へと進行しているという話から講義は始まりました。



講義趣旨

進むグローバル化

国際社会とは国と国とが作るコミュニティーであり、かつては世界を分ける単位は国家であった。今では国の中に住む人々、地方自治体、民間団体、企業、学校、NGOなどが主体になりつつあり、国家間の垣根は低くなっている。そのため、世界は国別の脅威の他に、国を越えたグローバルな脅威にさらされており、共通の課題を抱えている。

グローバル化の進行によって「勝ち組」「負け組」ができています。グローバル化をうまく利用しているルクセンブルク、ノルウェー、スイスはサービス産業で世界の先頭をいき、国民1人当たりの所得1位から3位までを占める。アジアの国々は、日本を除けば「勝ち組」と言えるが、世界には必ずしも「勝ち組」ではない貧しい国が存在する。これらの国の人々はグローバル化を恨み、自分たちの文化、伝統の殻に閉じこもり安心感を求めているが、グローバル化に抵抗することは無理であり、無駄である。日本は製造業ですぐれた科学技術やもの創りの力を失いつつあり、そのため企業はより広く安価な労働力を求めてアジア、中東、アフリカへ進出しようとする。結果として日本語だけでは仕事ができなくなっている。楽天やユニクロのように、社内で使う言語を英語にする企業も出ている。

国際的交渉力

交渉自体は国の内外を問わずタフなものなので、非常に柔軟な発想での交渉が大切である。国連の場合、交渉は演説会場ではなく会場の外で非公式に行われることが多いので、どうしても英語、フランス語、スペイン語の一つか二つを学ばざるを得ない。国連で使われる英語は、各国なまりの英語であるが、それぞれの文化のアイデンティティーをあらわしているもので、多少のなまりは気にせず、どしどし話すことが大切である。会話能力は大切だが、4技能を平行して習得しないと国際社会では尊敬されない。とくにきちんとした文法的な文章を書く力が大切であり、聞くこと話すことだけを偏重してはならない。内容のあるメッセージをお互いに交わし理解し合うことが大切である。日本人が国際交渉下手なのは根回しをしないからで、海外経験の未熟さが一因である。周到な準備のもと、機敏かつスピーディーに、自分のしっかりした考え方を、相手に聞いてもらえるようにすることが大切である。自分と分かり合える人を国境を越えてつくり、チームワークを持つ前向きな姿勢が大切である。

グローバル社会で働くために

グローバル社会で仕事をする場合、世界は違う国々や文化でつくられていることを認識する必要がある。相手も同じ人間と考えるのではなく、人は違うものだとして理解してつきあうと、お互い得るものも与えるものも多い。英語を含む外国語を学ぶことは、世界で活躍するために必要な手段であり、異なる文化、伝統を学ぶことになるので、自分の精神的な世界を広げることになる。

大国でも自国の言語だけでは生きられない時代になる。日本は大国でないのに、国全体で産業も文化もいわゆる「ガラパゴス現象」を示しており、この国でしか通用しないものをつくっているが、国内だけで自己満足に陥るのはきわめて危険である。世界はまだまだ沢山の違う文化、国々で構成されており、もう一つになったと考えるのは早計である。海外に行って役割を果たすには、外国の文化を理解し、流暢ではなくても内容のあることを話し合える外国語を身につけること、また多少の失敗にくじけないことが大事である。

小学校英語活動の充実をめざして

小学校英語活動支援

館林市と連携して行っている小学校英語活動支援では、研究指定校の館林市立第三小学校と第四小学校での授業研究が行われています。また夏季休業中には、館林市内の小学校の先生方を対象に、外国語教育研究所研究員による小学校英語活動ワークショップが3回開催されました。先生方は、英語活動をより充実させるために、導入・メインアクティビティ・授業全般で役立つ指導方法について研修を積みました。



小学校英語活動講演会は、文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課教科調査官の直山木綿子先生を講師に招き、8月6日（金）に館林市三の丸芸術ホールで開かれました。直山先生は、「外国語活動 23年度に向けて取り組みたいこと」という演題で、まず小学校外国語活動の目標について、「言語や文化について体験的に理解を深め、コミュニケーション能力の素地を養う」ことであると説明しました。また来年度に向けて学校で取り組みたいこととして、学級担任の役割理解、教室英語の練習、指導計画作成、教材整備、小中・小小連携を挙げ、組織として取り組むことの重要性を強調しました。後半には先生の豊富な経験からアクティビティの実演紹介もあり、会場は熱気を帯びたワークショップとなりました。

グローバルカフェ、高崎へ

グローバルカフェ

県民英会話サロン「グローバルカフェ」は、平成13年より県庁を会場に行ってきましたが、この度開催10周年を区切りとして、会場を高崎市産業創造館に移し、新しく生まれ変わりました。県庁会場では、開催回数319回、のべ14,426名に参加していただきました。

9月30日（木）には、高崎会場の開講式を開催し、100名以上の参加者がありました。開講式では女子大学・山口事務局長の挨拶に続き、国際コミュニケーション学部3年の鈴木真結さんが「Studying Abroad in Australia」という演題で、育英高等学校ALTのSylvain Bergeronさんが「A handshake is worth 1000 words」という演題で、それぞれ英語によるプレゼンテーションを行いました。またボランティアとして今後運営に携わるスタッフの方々も紹介されました。

「カフェ」では、外国語教育研究所研究員を中心にいくつものテーブルができ、さまざまな話題について会話が弾みました。参加者は、和やかな雰囲気の中で思い思いに英語を楽しんでいる様子でした。

「グローバルカフェ」秋学期は、9月30日（木）から12月16日（木）までの毎週木曜日18：30から20：00まで、高崎市産業創造館で開催します。事前申し込みの必要はありませんので、参加希望者はお気軽に直接会場へお越し下さい。



なお7月8日（木）には、県庁2階のビジターセンターにおいて、「グローバルカフェスペシャル」を行いました。3名の講師が英語によるプレゼンテーションを行い、また長い間参加されてきた方々6名による感想発表の場もありました。終了後は昭和庁舎へ移動しパーティーを行い、10年間の懐かしい思い出話に花を咲かせました。

群馬の魅力留学先でアピール

群馬県観光親善学生大使



群馬県観光親善学生大使の委嘱状交付式は7月14日（水）に県庁正庁の間で行われました。茂原副知事は委嘱状を渡し、「群馬県や自分を紹介できるよう準備を」と学生大使を激励しました。代表の植原倫香さん（国際コミュニケーション学部1年）は、「1人でも多くの人に群馬県に興味を持ってもらえるように頑張りたい」と、英国留学に向けての決意を述べました。また、一昨年夏に米国で観光親善学生大使の活動を行った、同学部3年の寺澤聖那さんが活動内容を報告しました。

22年度は観光親善学生大使になる学生に対して、留学先でより充実した活動が行えるように、群馬県観光講座や上毛カルタを使つての研修、群馬の生活文化や歴史などの講座を事前研修として行いました。



国際人としての第一歩

明石塾

明石塾第9期入塾式が大澤知事出席のもと7月23日（金）に県庁正庁の間で行われました。応募者の中から選ばれた11名（男子6名、女子5名）に、明石康所長から入塾許可証が交付され、第9期生を代表して大河原愛奈さん（県立中央中等教育学校5年）が力強く決意表明を行いました。



また入塾式後には、明石所長を囲んで懇談会が行われ、塾生はみな国際人としての第一歩に気持ちを新たに、8か月にわたるさまざまな活動への期待に胸をふくらませていました。外国語教育研究所は塾生の英語能力を高める機会を提供するため、38回の英語研修を行います。



塾長講義

入塾式のあと、明石所長より塾生に対し、第1回目の塾長講義が行われました。所長は、日本がリーダーレス社会であるという話題から、世界の紛争地域における平和構築の問題まで、さまざまなトピックを取り上げて講義をしました。塾生たちは緊張した面持ちで、一言一句を聞き逃さぬよう熱心に耳を傾けていました。

ó -- ³ïÛ´çÛ%o5

³ïÛ´çÛ

Ž --Z€tpxzfq *â>Gæ`oíwqS“ó --³ïÛ´çÛ›%o5Mh`‡b{

Ž --Z€tfq *âGæ
 ó --³ïÛ´çÛ@-¤ôGp-%oó • M‡²hjUG~t`hM\q -
 y5yy]q• G¶Ž --Z€t
 ™yy yy]--•»qy
 8yÔyy R â D ÔçP£ • %o•yy • 4f
 qyÔyy]q• G¶yyyy
 €C yyÿ Êç]¤¶ÍzôS¶Íz-¶Íw-»t|-- ›¤úqb”£
 ³ïÛ´çÛÜpxz-¤ôGw¤^ŠUØC!ô›æMsU`èª›ž `oó --›æloMX\q›
 •b”qq<tzó w Uó›iù\$t-Rb”\qsr›Â”Út^æ`‡b{qOz€C1!›!Ç
 ¢pb{€C1! xzŽ --Z€t‡p]ÈWXi^M{€C {x]q• G¶x”ÜÖ”’T’
 ¼çié”Åb”\q‹pV‡b{

Ç• pó -è

L]™Ç•«ãÒó -è

Ž --Z€txzÄ ÊwL]™Ç•«ãÒç¶--£wÇ•t0`zó t`%Æ^è`oó
 ¶6w;q) ™b”ÄÄ›æloM‡b{ âSxz D¤T’ D¤‡pÄ ÊÍEÇ• ›z D¤
 T’ DtTZoÄ ÊÆÇ• ›zf•g• scmZð
 `‡b{0ÅxMc•‹-¶Í`ã\wÇ•pb{Ž --
 Z€tZ€»qó --›)§`oM”• G¶w¶\UzÄ
 Ý”ÜÄÝ”½ĩ-w Üp\$Ä›æloM‡b{
 Ç•x:È•íz ÛtK”‹w)JPtzN•@”Üsr
 ‹ “Ö•h7’s`ÚáÇ-”³ãĩÆ^è`ozÔx\$
 so •q)›`^sU’¶|‡b{Ç•UôM™\qB¤
 —›ÈloÆ^t “ÊŠ”‘OžÓé”½›Ûg`sU’z
 ®L\$só !‹OZ€wØC)B‹æloM‡b{

y¶< C

,Žy¶§ Óé-ãÜ

,Žy¶§ Óé-ãÜ›Æ;`ozÕ8y¶•y8,ŽZ.t€C`h¶\Uz,ŽpWHO.s.g›4
 Q<`oM‡b{

Õ8yç¤µ»iÛ³”iG¶
 ô®VFy M`ÛáÇ-”³ãĩ¶æ á
 ²tqlolwy¶xz¿MH„›_of•tmMoÆ”q%òtzÔŠzf
 `oxüx tmMol \$tBQ”qo‹‘M;qqs“‡`h{xüwM”
 ÔtiZpsXzŽwH„tè›²Z”\qx’M\qpK“z\•T’xüw
 •RtVlqpqmpK-Oq-ô`oM‡b{

y8yªæµ ¶•T“w›Zv”ÑŸ”çÄë”«
 `Ôyãy ¶æó =¶J á
 ²xó x‹j-æ•VpbUz•x“ó ¶J\q`of•Žítª
 æµ ¶wŠÔ› Sx_o^hMqÔ‘¥loMhwpz\w áèqM
 O7™wâtæ&ÎMzªæµt ¶s€wZ.tæZh\qx‡xtH
 Os>s“‡`h{ ‡pó ¶qó ›)§`oVoŠpt’Tlh
 q¥Q‡`h{